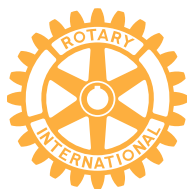


Rotary



奉仕しよう
みんなの人生を
豊かにするために
SERVE TO
CHANGE LIVES

WEEKLY

第1450回任意例会

2021年（令和3年）9月30日

清水中央ロータリークラブ

<http://www.portwave.gr.jp/shimizu-chuo/>

会長 渡邊 芳一 君
副会長 野々村 勲夫
幹事 黒田 侑加

例会日 木曜日 12:30~13:30

例会場 清水ナショナルトレーニングセンター

事務所 静岡市清水区真砂町3-20

054-371-9000

054-340-2550

◆会長あいさつ

会長 渡邊 芳一 君

静岡市コロナ感染指数も、ほとんどがレベル3以下となり、本日の理事会でいよいよ例会も正式に再開できることとなりました。とはいえ、ロータリーに限らず感染対策は現状のままで、しばらくはこの生活を続けていくこととなりそうです。

正式な例会再開は、会場で食事をとりながらのリアル参加と、今までのリモートによる参加も可能で、10月28日からハイブリット形式の例会となります。当然のことながら、リモート含めたメイクアップが可能です。いつもと違う、遠くのクラブからの参加もあるかもしれません。逆をいえば、世界中どこでもメイクアップができる可能性があります。

さて、先週は任意参加例会をお休みさせていただき申し訳ありませんでした。副会長の野々村さんよりご説明があったかと思いますが、静岡県のお仕事で、富士山の静岡県側の富士宮口、御殿場口、須走口の3カ所に、富士山保全協力金（入山料）を徴収するための小屋を、2か月の開山期間で設置しておりますが、期間を終えて撤収に行っていました。

お気づきのよう、2か月間限定で現地設置の小屋なので、移動や収納の都合で、パネル状で床や壁、屋根までも作られていて、トラックに分解して積載移動しています。

しかも、設置場所はほとんど国が管理している公園内なので、木造であること、屋根は三角形、色はこげ茶など厳しい規定があります。

昨年は、富士山自体が開かれず、今年初めには富士宮口が放火で使用できなくなり、コロナに限らず富士山登山は大変厳しい時期を超えてきました。山小屋のご主人とお話をすると、今年の登山者は例年の半分以下だったそうです。それでも山が開かれたことは大変な救いだったそうです。

我が家では隣のトヨタが駐車場を壊したおかげで、食事しながら富士山がみえるようになりました。やっぱり、静岡県側からみえる富士山が最高だなと思うのです。

◆幹事報告

◇理事会報告

(1) 10月例会の件

10月7日 リモート（任意例会）

10月28日よりハイブリット例会

(2) ハイブリット例会について

リアル（清水ナショナルトレーニングセンター）とZOOMでの例会

(3) 任意例会出席者のメイクアップ扱いの件

メイクアップの対象だが、ルールは今後作成する

(4) 10月10日(日)のマグロまつり ポリオデーの件

10月14日→10月10日(日)に日程変更の例会は、「清水港マグロまつり」中止につき休会。10月14日も例会休会とする。ポリオデーは「岡フェス」で計画

(5) 10月21日→10月23日(土) ハイキング例会の件

開催案内は近日中に配信

(6) ポケット版会員名簿作成の件

2022年7月末発行予定

(7) 退会者／理事ならびに委員長後任の件

石川秀樹君の退会届を受理。

プログラム親睦活動委員長後任には田島和子君

◇例会日程確認

10月7日 リモート（任意例会）

卓話：前田 陽俊 君

10月14日 休会

10月21日→10月23日(土) ハイキング例会

10月28日 「ロータリーの友」紹介

卓話：田島 和子 君

◆委員会報告

◎クラブビジョン委員会 石田 進一 君

先日お送りした戦略計画に訂正箇所があります。

(正) ※RLI（ロータリーリーダーシップ研究会）

◎さくらプロジェクトから 生子 哲男 君

さくらプロジェクトの三輪さんから「さくら通信」が送られて来ました。例会が開催された時に、皆さんに回覧します。

三十三間堂の通し矢

大 澤 弘 樹 君

現在、弓道界では全国的に有名な初春の風物詩の大会、京都「三十三間堂の通し矢（弓引き初め）」があります。これは、江戸時代にさかんに行われた藩の花形競技「通し矢」にあやかるもので、全国から新成人の男女、あるいは熟練の弓道者が集まって行われます。

先ず江戸時代の三十三間堂に関わる通し矢の盛んな時の話をさせていただきます。

三十三間堂は「蓮華王院三十三間堂」と言い、平安時代の後期、平清盛の資材協力により後白河上皇が創建しました。その後火災にあい鎌倉期に後嵯峨上皇によって再建されたものが今現在の建物です。

泰平のこの時代、京都三十三間堂大矢数で日本一になることは、弓道家の下級武士の出世の早道でありました。

大矢数とは、三十三間堂の外、西側廊下、幅約2.5m位、軒下の高さ4～5mの間を南北に矢通しすることです。

三十三間なら、尺貫法で換算すれば約60mですが、堂を支える柱が33本であることから、建築法でいう三十三間であって、実測として尺貫法の倍にあたる、約120mでありました。

そして、暮六ツから翌夕七ツまで夜通し約22時間、行射を行い矢数を数え競い合ったのです。

日本一になれば200石から500石の加増に預かり、一氣に中級武士の仲間入りとなれたのです。

500石ともなれば、長屋門付の屋敷に下働き数人を抱える中級武士の上位になり、屋敷の広さは300坪くらいあったそうです。

この頃、特に尾張藩と紀州藩が弓術を熱く奨励していましたが、日置流尾州竹林派、紀州日置流竹林派とお互いを意識する日置流派の好敵手だったからです。日・置と書いて日置（ヘキ）。と読みます。

紀州和歌山藩に和佐大八郎という弓道家がいて、こ



の大八郎が日本一になる前は、紀州を抑えて尾州の星野勘左衛門が8,000本を通して二度目の日本一となっていました。

しかし星野は、不可思議な事に4時間余りを残して8,000本で行射をやめてしまい、その数で日本一になったのです。不可解な行動に会場の大観衆は啞然として言葉を失いました。後で解るのですが、これ以上矢数を頑張れば、廃人になってしまうのではないかと勘左衛門は感じたのでした。

しかし、紀州としては藩の名誉にかけて負けてもいられず、何としても奪還しなければと闘志に火が付いき、期待を大きくかけられたのが和佐大八郎でした。

しかし、この時大八郎はまだ8歳、筋が良く順調に育っていましたが、まだその域に達していませんでした。15歳になると藩の期待が一身に集まるようになり、大矢数の挑戦が、漸くおりたのは大八郎が24歳の時でした。

尾州の星野に勝つためには、少なくとも13,000の行射を行わなければならない、今の時間で換算した場合5.6秒に一射引かないと矢数が届かないのです。

いよいよ始まり立射座射と順調に続いたのですが、3,000射過ぎるころから、肉体的、精神的に体幹を狂わせ、底知れない不安を感じるようになり、矢数が5,000射に近付くころ、とうとう意識を失い倒れてしまいます。

浄血療法という当時の治療法で即効性の漢方薬を飲み、半刻（1時間）ほど休ませると正気を取り戻し、再び行射を始めたのでした。

大八郎の行射は規定の翌夕七ツまで続き、京都東山に大太鼓が鳴り響いたときは、総矢数13,053射し、通し矢数は8,133射でした。

あまりの過酷さの弓術であり、この後、大矢数に挑戦した者は成否に関わらず肉体的、精神的に異常をきたし、後遺症に悩む者が続出しました。

これ以上大矢数を続ければ、弓術を望む若手はいなくなってしまうと、18世紀中期以降になると挑戦者を見ることがなく、結果この記録が現在まで最高記録として残っております。

